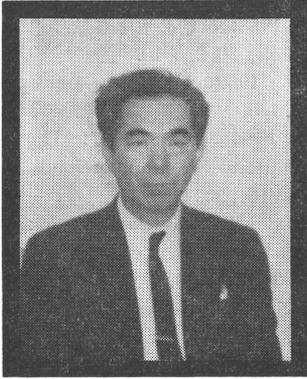


坂岸昇吉氏を悼む



1972年3月23日午後2時30分、坂岸さんは56歳の誕生日の前日永眠された。昨年末病の床に就かれてから、計報に接するまで、病魔の進攻の速さに驚かされた。私は気象庁時代坂岸さんと職場を共

にしたことはなかったが、最初に札幌管区気象台に奉職し、気象観測現業に従事していた頃、当時測候課におられた坂岸さんが新観測法にもとづく雲の観測の技術指導に来られたのがその温顔を拝した最初であった。その中でもとくに旧陸軍高射砲隊が使用していた大型レンジファイダーによる雲高観測の実習は印象に残っている。坂岸さんはその頃気象界における雲の研究の第1人者であり、1950年に制定された新気象観測法については、その制定委員会の委員であった。この観測法大改正の主要部分は、擾乱の進行と、それにともなう空の状態の変化を体系づけた点にあるが、この点では坂岸さんが中心となって活躍されたと聞いた。しかし私の第一印象では、このような権威者の素振りは微塵も受け取れなかった。その後測候課を訪ねた時などときどきお話しする程度のお付き合いであったが、私が東京勤務になると同じ頃、坂岸さんが札幌に行かれたことにも何となく親しみを覚えた。

日本の原子力開発の第一歩は1956年日本原子力研究所（原研）の設立によって踏み出された。当時多くの国民は科学技術発展への期待と同時に、大きな不安を抱いていたことは広島、長崎、ビキニでの被災国民として当然のことであった。そこで原研としても、もし大気中に放射能が漏洩するようなことが起った場合、その影響を事前に評価し安全性を確認しておくことが急務であった。

日本でとくに気象界と原子力界との密接な関係ができたのもこのためであった。坂岸さんはこのような重大任務を帯して原研に入り、グループの指導者として、大気拡散実験研究を行ない、多くの成果を挙げた。また1961、62年には完成したばかりの2号原子炉から放射性アルゴンを人為的に放出し、風下の放射線量率の分布を測定するという、日本としては画期的な実験も行なった。これら一連の実験研究を行なったころから約10年を経た今日、日本各地に発電用原子炉が建設され、原子力発電もわれわれに身近かなものとなったが、その環境安全評価の方式の大部はこれらの研究成果にもとづいて組立てられたものである。

坂岸さんはその後原研の保健物理安全管理部次長を経て、1966年に同部長の要職に就かれ気象海洋関係だけでなく放射線防護を中心とする原研の安全管理全般を担当されるようになった。坂岸さんは「私ども現場にあるものは……」と口ぐせのように言っておられたが、管理職の座にあっても決して現場を忘れず、自から現場の人として活動された。これは半ば坂岸さん個人のパーソナリティーに、半ば気象庁の伝統的精神を受けついだものと私は思う。私なりに坂岸さんの人物としての印象を「怒らず」、「拒まず」、「慌てず」という言葉で要約できるような気がする。どんなに気に障るようなことをいっても、決して怒らず、悠々と話し相手になって下さった坂岸さん。連絡の手違いで非常事故訓練の警報を本物と思い込んだけれど、しかも慌てなかった坂岸さん。坂岸さんはわれわれ俗人の有限の尺度では測りがたいものを持っておられた。原子力の環境安全問題がますます重要視されている今日、まだ働き盛りの坂岸さんを失ったことはまことに痛恨のきわみといわざるをえない。

私はこの文章を書いていると、坂岸さんのあの濃い眉の温顔が眼前に現われ、あの独特の間合いをもった話しぶりが耳もとに聞えてくるような気がする。つつしんで御冥福をお祈りしたい。

（伊藤直次）